

令和3年秋期の県内植木市場における取引動向

愛知県植木センターでは昭和61年から県内3植木市場において、主に地元から出荷される緑化樹木を中心に21品目（一般植木、株・玉物、生垣用樹）の取引量を春期（2月～4月）と秋期（10月～11月）に調査しております。また、平成20年からは近年市場でよく見られる10品目を追加して調査しております。今回は令和3年秋期の取引動向の概要について紹介します。

1 全体取引量（追加樹種を含まず）〔図－1〕

今期の全体取引量は約5.8万本で、前年同期（約6.7万本）より約0.9万本減少しました。

一般植木は対前年同期比88.3%、株・玉物は94.6%、生垣用樹は73.3%で、全体では87.3%となりました。

全体取引量は、平成10年以降減少傾向が継続しており、平成20年と28年には一時的に増加に転じたものの、減少傾向に歯止めはかからず、今期の取引量は平成10年に比べると13%まで減少しました。

2 用途別の取引動向（追加樹種を含まず）〔図－1、図－2〕

(1) 一般植木（12品目）

一般植木（自然形・仕立物）の取引量は約1.5万本で、前年同期（約1.7万本）より約0.2万本減少しました。

自然形では、ヒバ類が増加し、カエデ類、キンモクセイは減少しました。

仕立物では、クロマツが増加したものの、取引数量は低調のままです。

(2) 株・玉物（5品目）

株・玉物の取引量は約3.0万本で、前年同期（約3.1万本）より約0.1万本減少しました。

ツツジ類が増加に転じたものの、株・玉物の大半を占めるサツキとイヌツゲがともに減少しました。

(3) 生垣用樹（4品目）

生垣用樹の取引量は約1.3万本で、前年同期（約1.8万本）より約0.5万本減少しました。

生垣の主要樹種であるサザンカとイヌマキは減少傾向が続いています。

3 調査追加樹種（10品目）を含む調査結果〔図－3、表－1〕

平成20年から、近年市場でよく見られる樹種を、調査対象として追加（一般植木ではハナミズキ、シマトネリコなど7種、株・玉物ではドウダンツツジなど3種）しました。

追加樹種を含めた取引量の上位10品目では、減少傾向にあるオタフクナンテン、サツキが依然として上位を占めており、ツツジ類、シマトネリコが続いています。各樹種とも前年に比べ増減があるものの、突出した取引量はあまりなく、全体に樹種が平均化（多様化）している傾向がみられます。

* 調査市場 *

農事組合法人 井堀植木生産組合（稲沢市井堀江西町）

矢合植木市場株式会社（稲沢市矢合町）

福地植木生産組合（西尾市芥藤町）

